巻　　頭　　言

長崎短期大学　学長
安 部　　恵 美 子

令和３年２月に出された中央教育審議会大学分科会「教育と研究を両輪とする高等教育の在り方について（審議まとめ)」の中では、教育と研究を一体不可分のものとする、今後の大学のあり方や教員の役割に関して、以下の記載があります。

①大学及び教員は、常に独自性と先進性に満ち、新たな知を生み出す活動である研究を展開し続ける必要がある。

②大学の教員は、教育者としての側面と、研究者としての側面を持ち合わせており、多様な経歴・経験を持つ者が切磋琢磨しつつ、その能力を高め、教育研究活動を展開していかなければならない。

③教員に対して、各大学のミッションに対応するような活動を行っているかという観点での教員評価が十分に行われてこなかったため、研究面のディシプリンに対する意識が高い一方で、社会貢献や異分野交流への意識が必ずしも高い者ばかりではない。

④教員は、自らの研究が学生の教育に活かされているのか自己評価し、部局長、同僚，学生等による多面的評価を実施する。

上記の①及び②は、大学および教員の憲章や綱領ともいえる本来的機能であり、本審議まとめでも、冒頭の「１．基本的考え方について」で述べられています。それに対して③④は、「教育と研究を一体不可分なものとして人材養成と研究活動を行う」大学における、教員の研究に関する課題を示しています。

さて、本学での毎年の紀要の発行は、①②を担保するものであることは言うまでもありません。各分野の研究者である本学の教員等の業績を公にすることで、本学が研究機関であることを示しています。しかしながら、さらに、これからの大学には、③④に示す「大学のミッションに対応する」「学生の教育に活かされる」研究であるかについて、多面的な評価をすることが求められます。

本学紀要の投稿論文には、毎年、授業改善や学生支援に関連する実践的な研究が多いですが、短期大学教員の研究の特徴と言えるかもしれません。本年号にも、その傾向が顕著に見られます。今後は、こうした各研究の成果を、大学のミッションや学生の教育に活かすことが出来たかどうかについての評価が必要になると思います。

本年度は、コロナ禍という危機的状況の中で、感染拡大防止と学生の学修機会の確保の両立に試行錯誤しました。授業のオンライン化やハイブリット化に取組むなど、大学教育の転換期を迎えて学務が錯綜する中に、編集作業に最後まで携わっていただいた、紀要編集委員諸氏のご尽力に、心より感謝申し上げます。

令和３年４月